



人間科学部長

下斗米 淳

教授

しもとまい あつし

1961年東京都生まれ。1984年学習院大学文学部卒業。1990年学習院大学人文科学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得退学。2007年博士（文学）（金沢大学）。主著として、『はんらんする身体』（共著、専修大学出版局、2006年）、『自己心理学6』（編著、金子書房、2008年）、『図説現代心理学入門』（共編著、培風館、2015年）、Parental social power, co-parenting, and child attachment: early to late Japanese adolescence transitions. *Current Psychology*, 39, p. 953-964. (Springer, 2020)。

神田5号館にて

大学という場について思うこと

昨年度9月より人間科学部長を拝命致しました下斗米淳と申します。私は、大学院を修了してから、学習院大学や帝京大学に勤めた後、専修大学に専任講師として入職し、今年で28年目を迎えました。専門は社会心理学・教育臨床心理学です。

人間科学部教員は、学生一人ひとりの問題意識を大切にしながら真理探究をお手伝いし、一緒に問題の答えを見いだすメイトのような存在であろうとしています。34歳で入職した頃は、私はゼミ生から「アニキ」と呼ばれていましたが、ある頃学生から「先生は父親にしか見えません」と言われました。もう今では「おじいさん」と思われているのかも知れませんが、私自身は入職時と変わりなく学生にとってメイトであり続けたいと思っています。

一生の出会い、人との絆の大切さ

小学校では勉強は全くせず、夕方まで泥だらけになって遊び回っているような子どもでした。勉強もしないのに、その頃は漠然とお医者さんになりたいと思っていました。中学に入ると、なぜかいろいろな地域の民話ばかりを図書室から借りてよく読んでいました。担任の国語の先生からは、珍しい本を読むねと言われたことを覚えています。小学校で医者になりたいとか、中学で民話に惹かれていたことを振り返りますと、その当時から「人間」に興味があったのであろうと思います。現在も学会出張すると、必ず出張先の地域の人々の雰囲気を感じようと、地元の人が集まる商店街などを歩き回ります。不審

がられていないことを祈りながら。中学の頃はこれまた漠然と研究者になりたいと思うようになりました。私の親族には大学教員が非常に多く、両親からは下斗米は学者の家系だと言われていたことが影響していたように思います。私は都立両国高校卒業ですが、この高校は勉強に大変厳しく、先生も生徒も牢獄高校と自虐的に呼ぶほどでした。高校では、倫理の授業の中でカウンセリングの録音を聞いたことをきっかけに、無意識の世界に驚き、心理学を学びたいと思うようになりました。いよいよ大学受験がせまった高校3年の時に父親が病にかかり、看病などで受験ができなくなりました。しかし、高校には様々な大学から指定校推薦がきていました。私はその中から学習院大学への推薦入学を希望し、教員室で担任の先生に申し出ましたが、担任からは心理学なら筑波大（担任の母校）に行けと言われ、また隣で話を聞いていた先生からは、早稲田や慶應に合格できるので何でわざわざ学習院なんて行くのかと反対され、ひどくショックを受けました。

その想いをひきずりながら学習院大学に進学したのですが、これが私にとって大きな人生の岐路となりました。と申しますのも、人として研究者として今も目標であり続け、心底敬慕する恩師と出会えたからなのです。もちろんそのように心酔や敬慕できる先生がいらっしゃることは入学後に知るわけですから、幸せな奇遇の何物でもありません。なお、妻も同じ学科の後輩でした。単に有名大学であるとか、世間の通りが良いとかは全く意味のないことで、私は幸運に恵まれ一生の出会いと人との絆がいかに大切かをひしひし感じています。お子様にも在学時あるいは職場の中に、一生の出会いが待っていることと存じます。

今の学生に望むこと

十数年前までは、例えば新入の同級生に向けて自己紹介をしてもらおうと、「〇〇することが好きなので、好きな人がいたら一緒にしましょう」と言う学生ばかりでしたが、それ以降、同じ自己紹介をする「〇〇することが好きなので、好きな人がいたら話しかけて」と受け身調に変わったことが気になっていました。漠然と友人からの拒絶不安をいささか抱えているのかも知れません。また以前に、卒業間近のゼミ生から「私は専修大学に入ってよかった」

と言われました。その理由を尋ねたところ、「だってやってみたい、経験したいと思えば、大学は必ず応えてくれたから」とうれしい言葉を返してくれたことがありました。しかしこれは、自分から求めることをした結果であることを忘れてはいけないと思います。私は、今の学生はそれぞれに自分をもっていると思っています。しかし、その自分を周囲に表現し、自分の望みに応じて能動的に求めていくことを控えてしまうモラルのようなものを感じます。大学という場は多様性が尊重されますので、皆違って当たり前、学生には互いに自分を出し合い、理解し合えるようになってほしいと思います。

また不謹慎かも知れませんが、ある男子トイレでの出来事です。私が用を足していると3人の学生が一緒に入ってきました。その時の彼らの会話は、「えっマジ?」「マジマジ」「マジかよ」「超マジ」「マジかあ」というもので、それでも立派に会話が成立しているのです。十分に伝え合えるのであればこれで結構なことだと思いますが、一方で年上や年下のように共通理解の基盤が違う人との間では通用しにくいこととなります。感覚的理解は大切ですが、そこに至るには視点の異なる人に合わせた適切な記号化と解説も必要ですから、多様な人々と関わっていただきたいと思います。

育友会と共に

ある社会心理学者が、小学校低学年の児童と高学年の児童をペアにして一緒に課題に取り組ませるといふ実験を行いました。その結果は、高学年の児童の方がより多く学習できたという意外なものでした。しかしこれは、学生と教職員、先輩や後輩だけの話ではなく、育友会と大学との関係にも示唆深いことと思います。学生生活のある事柄では大学が学ばせていただき、別の事柄では育友会にも実りのあるような関係性が必要なのではないのでしょうか。これまでも、大学は育友会に対して情報を提供するだけでなく、育友会から大学に対するご意見・ご要望を伺うことで、この相互の連携関係が機能してきました。そうしてより一層、育友会と大学が一緒になって学生が成長いただけるよう絆を強固にしていければと存じます。

最後になりましたが、育友会会員の皆様とお子様のご健勝を祈念致しますと共に、引き続きご支援の程をお願い申し上げます。